

環境と人間Ⅲ

里山と人間

日時：平成20年8月9日（土） 13:00～15:00

講師：只木 良也（名古屋大学名誉教授）

概況



愛知県の自然と里山について、多くの写真を交えて講義をしてくださいました。

I. 森林:世界の中の日本、日本の中の濃尾平野

降水量によって植生が決定される。日本の年間平均降水量は 1700mm 以上で、全国的に森林が成立する。日本の森林面積は国土の 2/3 にあたる 2512 万 ha。亜熱帯多雨林から亜寒帯針葉樹林までみられる。愛知県の森林面積は、県土の 44% にあたる 221 千 ha、天然林 73 千 ha、人工林 141 千 ha、他 7 千 ha。現在の愛知県内の森林では、アカマツ枯死跡に、上層にコナラ・アベマキなどの落葉広葉樹、中層にソヨゴなどの常緑広葉樹、下層にヒサカキ・アラカシ・コジイなどの常緑広葉樹の構造を持つ林が普通にみられる。

II. 上流森林の恵み

東海地方の農業、工業、人々の日常生活は、水量が豊富な木曾川水系によって支えられてきた。その上流水源には、森林が発達。そこに生育する世界一の木材と称される木曾ヒノキ(尾州檜)は江戸時代以降東海地方の活動の資金源であった。

III. 「自然」を維持するために

遷移とは植生が自然に移り変わっていく現象のことである。人為を排した「保存」だけでは、遷移途中の自然を維持することはできない。「保護」をしたために保護の対象が消失した例として、信州霧ヶ峰の草原や熊本立田山のヤエクチナシ、京都嵐山のアカマツ林などがある。自然保護の手段には保存、保全、防護、修復、維持がある。

保護対象の遷移を考えた上で、自然保護の手段を講じなくてはならない。

IV. 里地の保全

農地と農村は里山に支えられてきた。落葉は堆肥と厩肥(有機肥料)として利用され、薪と柴は熱エネルギーと木灰(無機肥料)として利用されてきた。木材は住居や道具の材料、特に東海地方では窯業燃料として用いられてきた。しかし、昭和 30 年代に化学肥料と石油燃料の普及によって里山の利用がなくなり、それはかえって里山の荒廃を招いた。里山は環境保全機能論的、生態系論的、文化論的に必要である。そして、社会資本として、または都市施設として里山を位置づけることが必要である。